

新島襄のキャンパス創造―京都における大学の歴史地理―

河島 一仁

第一章 はじめに

幕末から明治にかけて、京都の都市景観は変化した。京都所司代が置かれていたが、この都市はそれまでにさほどの武士を擁していなかった。しかし、ペリーの来航以降における政治的な変化によって、諸藩の藩邸（藩屋敷）が増加して武士が流入し、政治的な対立によって武力抗争が起こった。その一つが、元治元年（一八六四）の禁門の変である。これによって市街地は甚大な損害を蒙った。

東京奠都によって、天皇と皇族、多くの公家が東京に転住し、京都御所の周囲にひろがっていた屋敷群が、無住となり、荒廃するにいたった。東京奠都は地域経済にも大打撃を与えた。その苦境を克服すべく、博覧会の開催、琵琶湖疏水の開通、発電事業の展開、路面電車の開業などのさまざまな活性化策によって、京都は発展の方向に転じた。広く捉えれば、私立学校の創出もそれに含めることができる。同志社英学校はその代表例である。高松家が所有するかつての中井家の屋敷を借りて、同校は始まり、翌年に薩摩藩二本松屋敷跡に移転した。

私立学校のいくつかは発展を続け、「大学」を称するものも現れた。そのような状況を踏まえて、政府は日本の大学を種別するにいたる。大正七年（一九一八）に公布された大学令は、日本の大学を「帝国大

学其ノ他官立ノモノ」と「公立又ハ私立」に分類している。京都では京都帝国大学のほかに、同志社大学（大正九年）、京都府立医科大学（大正十年）、龍谷大学・大谷大学・立命館大学（大正十一年）が大学令による大学となった。

筆者は平成十七年（二〇〇五）から、帝国大学と私立大学に関して、「京都における大学の歴史地理」というテーマに取り組んできた。本稿では、僧侶の育成機関として数百年の前史をもつ龍谷・大谷両大学を別にして、近代以降で最古の私学・同志社大学を創立した新島襄（一八四三―一八九〇）の「キャンパス創造」を考察の対象とする。私立大学のキャンパス創造は、建設資金の確保、空間デザインの構想、教育理念の明示、ならびに地表に大学の景観を創出することを意味している。大学がキャンパスの周辺にも影響を及ぼすことも歴史地理学的には捉えるべき現象である。

本稿は、新島襄のキャンパス創造について、三つの視角から考察する。「プロテスタント・キリスト教と新島襄の位置」（第二章―第四章）、「同志社英学校と女学校」（第五章―第七章）、「キャンパス創造と同志社を取り巻く状況」（第八章―第十二章）の三つである。対象となる時期は安政期から昭和三年までで、空間的には亡命した新島が過ごしたアメリカ合衆国のニューイングランドと、日本、特に京都が中心となる。なお、先学の諸研究と既刊の資料を用いる本稿は、学説整理

の域を出ないこと、キリスト教に関して、「宣教」「布教」「伝道」などを、ほぼ同義と見なして叙述を進めること、ならびに和暦と西暦を併用しているものの片方を省略する場合もあることなどをおことわりしておく。

第二章 プロテスタント・キリスト教の伝来

安政五年（一八五八）に日米修好通商条約が締結され、箱館・新潟・横浜・神戸・長崎が開港地となった。その翌年に、アメリカ合衆国の宣教師 J・C・ヘップバーンと S・R・ブラウンが横浜に到着した。ヘップバーンは長老派、ブラウンは改革派に属していた。^① プロテスタント・キリスト教はこうしてアメリカ合衆国から日本に伝来した。^② なお、新島との関連でいえば、アメリカにいる彼と両親との手紙のやり取りを仲介したのは、ブラウンなどの横浜にいる宣教師であった。^③

プロテスタント・キリスト教を受容したのは「武家出身の青少年」^④であり、日本における「プロテスタントの発祥地」とされる横浜・熊本・札幌には、横浜バンド・熊本バンド・札幌バンドと呼ばれるキリスト者の集団が出現した。横浜バンドは J・H・バラと S・R・ブラウンらの感化で入信した青年たちの総称で、明治五年（一八七二）に日本初のプロテスタント教会である日本基督公会を設立した。^⑤ 熊本バンドは、明治四年（一八七二）に熊本藩が設立した熊本洋学校で、アメリカ合衆国から来た L・L・ジェーンズからの影響で信仰の道に入った金森通倫・海老名弾正・徳富蘇峰らによって明治九年（一八七六）に組織された。その後、ジェーンズは解雇され、熊本洋学校は閉鎖された。入信した学生の多くは同志社に入学した。^⑥ 札幌バンドは、

明治九年に開学した札幌農学校で、W・S・クラーク、M・C・ハリスらに導かれて入信した新渡戸稲造・内村鑑三・宮部金吾らによって組織された。^⑦ これらの三つのバンドが、日本におけるプロテスタント・キリスト教の源流といわれている。

太政官布告で、キリスト教禁令の高札が撤去されたのは明治六年（一八七三）のことであった。高札の撤去は、欧米諸国の外圧によるもので、明治政府はキリスト教を積極的に認めたというわけではなく、黙認した、と解されている。ヘップバーンやブラウンが安政六年に日本に来たこと、明治五年に日本基督公会が創設されたことなどをみると、高札の撤去以前にプロテスタント・キリスト教の諸宗派は、日本人の改宗にすでに成功しつつあったことがわかる。とはいえ、今日に至っても日本におけるキリスト教人口は全体の一パーセント程度でしかないことをふまえておこう。^⑧

第三章 宣教師の新島襄

板倉主計頭の家臣である新島七五三太が「恐れ多くも国禁を犯し」^⑨て、米船のベルリン号に乗り込んだのは元治元年（一八六四）のことであった。^⑩ 上海に着いてから米船ワイルド・ロウヴァー号に乗り換えた。そしてインド洋と大西洋を経て、慶応元年（一八六五）に新島はボストンに上陸し、ワイルド・ロウヴァー号の船主である A・ハーディ夫妻に引き取られた。彼は生活費も学費もすべて同夫妻の支援を得て暮らすことができた。

新島は父・民三への手紙のなかで、A・ハーディのことを「ワイルドバルと名くる船の船主」でボストン港「指をりの金穴家」^⑪と説明している。新島は「いわば金持ちのぼっちゃんとしてアメリカを体験

した」¹²のである。彼はA・ハーディ夫妻の敷いた道を歩き、決して苦学をしたわけではなかったようである。

A・ハーディは長きにわたってアメリカン・ボード (American Board of Commissioners for Foreign Missions) の要職についていた。ボストンに本部を置くアメリカン・ボードは一八一〇年に「会衆派 (Congregationalism)」というプロテスタント教派が主体となって創設した「アメリカ最古の海外宣教団体であり、一九六一年に他の団体と合併して名称が変わった」¹³。「日本での活動開始は、一八六九年である。以後、一九六一年まで九十余年にわたって、ボストンの本部から数多くの優秀な人材 (男女とも) が日本に送り込まれた。一九五九年までの累計では、総数は三百四十六人に及ぶ」と本井康博氏は先行研究から引用して述べている。

新島は数ある宗派を比較・検討したうえで熟慮して会衆派を選んだ、というわけではない。ワイルド・ロウヴァー号の船長が、船主のA・ハーディに彼を紹介したのがその契機であった。新島は宣教師になることを希望したので、海外への宣教に熱心なA・ハーディの支援を得ることができたのである。

マサチューセッツ州のアンドーヴァーにあるフィリップス・アカデミー (高校) 英語科に一八六五年十月に入学し、一八六七年六月に卒業した。同年九月にアーモスト大学に入学し、一八七〇年七月に卒業している。この間の一八六六年十二月にアンドーヴァー神学校付属教会で洗礼を受け、新島はキリスト者となった。

一八七〇年九月にアンドーヴァー神学校に入学し、一八七四年に同校を卒業した。この間で重要なことは、一八七一年に森有礼駐米少弁務使 (公使) と出会い、森の斡旋で日本政府の旅券と留学免許状が送付されたことである。これによって「国禁を犯し」たことはもはや罰

せられないこととなった。一八七二年五月から、岩倉具視全權使節団の田中不二麿文部理事官に随行してヨーロッパ諸国の教育視察に参加している。一八七三年九月にニューヨークにもどり、アンドーヴァー神学校に復学した。

一八七四年五月、新島はアメリカン・ボードの日本ミッシヨンの準宣教師に任命された。和田洋一氏は、「正式の宣教師ではないが、宣教師に準ずる待遇を受けることになったわけで、任命の日付けは明らかでないが、すくなくとも日本に到着するまでの交通費はボードによって支給され、日本におけるその後の生活費、行動費も保証されることになった。帰国後どのようにして生計をたてるかという不安から新島は解放されたのである」¹⁴と述べている。

七月にアンドーヴァー神学校を卒業した。和田氏によると、彼は「本科生ではなく選科生として卒業証書を受け取った。そして式典参加者を前にして記念のスピーチを行なう榮譽を与えられ、『Preaching of Crist In Japan』という題でしゃべった。中身は全部日本語」であった。

一八七四年九月二十四日、ボストンのマウント・バーノン教会で新島の按手礼が行われ、正規の牧師となり、宣教師となった。¹⁵十月九日、バーモント州ラトランドで開催されたアメリカン・ボードの年会の最終日に彼はスピーチをした。この時に日本にキリスト教主義学校の設立を訴えて約五千ドルの寄付申し込みを得たことが新島に関するエピソードとして語られることが多い。和田氏も次のように書いている。

この時、新島は「自分は無事に日本へ帰ったのちは、一つのキリスト教主義大学を設立したいと思う、そのためにはどうしても基金が必要であり、皆さまがたの支援をえたい、という意味のことであつたよ

うである」⁽¹⁶⁾（傍線は筆者による。以下同様。）と和田洋一氏は述べている。そのスピーチに感激した聴衆から約五千ドルの寄付申し込みがあった。「キリスト教主義大学」の構想を一八七四年十月のスピーチで公言したと和田氏は書いているが、「あったようである」といささかぼかした表現になっている。

この記述の典拠は、新島による「同志社設立の始末」⁽¹⁷⁾であろう。「明治七年の秋襄の将に米国を辞して帰朝せんとするに際し」、バートン州ラトランドで開催された大会議で新島は「訣別の詞」を述べた。そのなかで「今や襄貴国紳士諸友と袖を分て恙なく我国に帰るを得ば必ず一の大学を設立し、之が光明を仮りて我国運の進路を照し」と強調し、「慷慨悲憤」した新島は壇上で感涙した。それに感激した聴衆から多額の寄付の申し出があった。新島はこう書いている。

太田雄三氏は、新島が書いていることを真つ向から否定し、「要するに、『同志社設立の始末』に出てくるラトランドでの新島の演説は、彼が実際に話したことはほとんど無関係な後からの作文である。だから、新島は『同志社設立の始末』のいうような『一の大学』ではなく、ラトランド・ウィークリー・ヘラルド紙上に報道されたように、福音を広めるための『教師と伝道師を養成する訓練機関』の設立を訴えて聴衆を動かすことに成功したというのが歴史的な事実であろう」⁽¹⁸⁾と述べている。太田説によれば、新島は「同志社設立の始末」で事実ではないことを書いたことになる。

「一の大学」ではなかったことについて、アメリカン・ボードの運営委員会議事録をもとにした本井康博氏も「学校が『トレーニング・スクール』（伝道師養成所）と性格づけがなされていること、ならびに設置場所が神戸とされている点」⁽¹⁹⁾を指摘している。寄付の申込が多額になったのは、伝道師養成所を日本に創設することに、厚い信仰心を

抱く人々は心からの賛意を示してくれたからであった。そうであれば、「同志社設立の始末」にある新島の後付けには無理があると思われる。

寄付を申し出たアメリカ人は、新島が「間接伝道」⁽²⁰⁾を後年に標榜して、同志社大学の創設を目指すことを予想していなかったのではないか。

第四章 アメリカン・ボードの京都宣教と山本覚馬

和田洋一氏によると、アメリカン・ボードは会衆派の外国宣教の組織とみられるようになり、それに対して他の宗派はそれぞれの組織を持つようになった。日本への伝道に関して、長老派・改革派・監督派・バプティスト派が一八五九年と一八六〇年に宣教師を横浜に派遣した。前述のヘップバーンとブラウンがそれらに含まれる。

一八六八年に新島はアメリカン・ボードのクラーク総主事を訪ねて、日本に宣教師を送ることを訴え、翌年の十一月に会衆派の宣教師グリーンが日本にむかった。⁽²¹⁾グリーンは横浜にも滞在したが、そこで宣教活動には困難を感じた。というのは、本井康博氏が指摘しているように、この頃には日本におけるプロテスタント諸宗派の「伝道地分割」が不文律ながら存在していたからである。つまり京浜地方の伝道を長老派と改革派が担当し、関西地方を会衆派が受け持つことになったので、グリーンは神戸に伝道の拠点を置くことにした。⁽²²⁾

アメリカン・ボードの宣教師たちは、神戸や大阪の⁽²³⁾ような臨海部にどまらず、内陸の京都での宣教を企図したが、当時、外国人が京都に入ることは許されていなかった。ところが、明治五年（一八七二）

の第一回京都博覧会では外国人の入京が認められ、神戸にいるアメリカ合衆国領事に「入京切手」を申請して入京の許可を得ることができた。⁽²⁴⁾ アメリカン・ボードの四人の宣教師全員が第一回の京都博覧会を訪れ、京都に滞在した。その折に、京都府の顧問である山本覚馬と会うことができた。翌年の第二回にも宣教師は京都を訪れたが、その時にも山本に会ったかどうかはわからない。明治七年（一八七四）の第三回にも宣教師たちは京都にやって来て、山本覚馬と交流したことが推定されている。⁽²⁵⁾

新島は、宣教の拠点である「大阪ステーション」を中心に、大阪でのキリスト教主義の学校建設への取り組みを明治八年（一八七五）一月から始めていた。⁽²⁶⁾ 新島が京都に来た目的は保養と博覧会を見物することであった。⁽²⁷⁾ 河野仁昭氏によると、「第四回京都博覧会の見物にきたついでに、木屋町の旅館で静養していたM・L・ゴードンの誘いを受けて、新島襄が大阪の川口から京都へきたのは、明治八年四月初旬」であった。新島を山本に紹介したのは、木戸孝允がゴードンである。⁽²⁸⁾

山本が新島に対して京都での開校を勧めたことはよく知られた事実である。その理由を河野仁昭氏が指摘している。いささか長いが引用してみよう。教育の重要性を強く感じていた「山本にとって新島がところと志している学校は、願ってもない本格的な英学校であった。ましてその私立学校はアメリカ人の寄附によって建設され維持されるのだから、京都は財政的な負担を必要としないのである。独逸学校・英学校・仏学校そして京都慶應義塾の挫折のあとだけに、山本に限らず榎村正直や京都府の首脳が、新島にその学校をつくらせることに賛成したのは、いわば誘致であったとみてよい」⁽²⁹⁾のである。つまり京都府の側に、それを受け入れる素地があった。

新島は近代科学も教える学校を構想していたが、アメリカン・ボードの他の宣教師の多くがそれには否定的であった。⁽³⁰⁾ 会衆派との関係が強いアメリカン・ボードはキリスト教の宣教団体であり、新島の構想はその趣旨に合致していないとみなされていたのであった。

新島は日本が文明化していくためには教育が重要であると考えていた。それではいつから彼はそれを認識していたのか。ラトランドでのスピーチに関してすでに言及した、明治二十一年（一八八八）に頒布された「同志社設立の始末」には、アーモスト大学在学中の経験に関して次のように書いている。「苟も学業の余暇あれば必ず諸州を歴遊し山河を跋涉し、務めて建国の規模を探り風土人情に通ずるを以て事とし、到る処の大中小学より博物館、書籍館、盲啞院、幼稚院、其他百工技芸の講習所、百種物産の製造所に至る迄概ね之を検閲し、或ハ諸州の学士有名な人物に接見し親しく其議論を聴くを得て大に悟る所あり」⁽³¹⁾と書いている。しかし、太田雄三氏は、新島が「そのような組織的な視察研究に従事した形跡もない」と指摘している。同氏によれば、新島が教育をみずからの使命と感じるにいたったのは、決して内発的なものではなく、岩倉具視全權使節団にいた田中不二麿文部理事官の調査に協力したことがその機縁であった。⁽³²⁾

ラトランドでは実際には「トレーニング・スクール」（伝道師養成所）の創設を訴えたが、「同志社設立の始末」では、日本で寄付を募るために、太田説によれば、それを「一の大学」に言い換え、してもいないアメリカ合衆国での「組織的な視察研究」をしたように記述している。これと同じ明治二十一年十一月に活版印刷で頒布された「同志社大学設立の旨意」⁽³³⁾とを比較すると、相違点を見つけることができる。「旨意」には「基督教主義」は四回も登場するが、「始末」にはなぜか「基督教主義」はまったく記されず、かわって「真正の教育」と

「真正教育」があるだけである。読み手によってキリスト教に言及しない方が得策と判断した際には、新島はそれを別の言葉で置き換えたのであった。

第五章 二本松屋敷跡の購入

J・D・デイヴィスは新島の没後に、ラトランドでの五千ドルについて次のように記述している。新島の日本への帰国前に、アメリカン・ボードの宣教師団は、アメリカン・ボードのクラーク総主事から手紙を受け取った。「それによると、日本におけるキリスト教の働き手を訓練するための、大学程度の伝道師養成学校をたてる目的で集められた五千ドルの金が待っているというのであった。私たちはまだそのような学校のことを考え始めていなかったし、少なくともそれはずっと先のことだと感じていた。その年、私たちの二つの教会、すなわち十一名で始まった神戸の教会、七名ではじまった大阪の教会が組織されたところであった。³⁴」その金は「日本におけるキリスト教の働き手を訓練するための、大学程度の伝道師養成学校」を建てるためのものであった。これがアメリカン・ボードの認識であった。

デイヴィスの記述にもどろう。新島の帰国前に、アメリカン・ボードは神戸と大阪で教会を設立していた。新島は「数か月にわたって大阪府知事から大阪市に学校を建てる許可を得ようと努力した」が、「知事は大阪に学校を設立する許可は与えるが、宣教師が教えることはまかりならぬ」との返答であった。新島は大阪での設立を断念した。「次に私たちの思いは京都に向いた。しかし京都は内陸の都市であり、外国人の居留は許されていなかった。それに京都は千年間にわたり日本の仏教と神道の中心地でもあった。おまけに京都はわたした

ちの宣教師団が開拓した仕事の根拠地から遠くはなれていた」が、「宣教師団は、もし許可が得られるならば京都に学校を建てることにししぶ同意した」。

それをうけて、「一八七五年六月、私は新島とともに京都を急いで訪れ、五エーカー半、すなわち六千五百坪の広さの屋敷を視察したのであった。(中略)この土地は以前薩摩大名の屋敷だったところで、最後にここに住んでいたのは島津三郎という人だった。そして今では目の見えない山本氏の所有になっていたが、彼はそれを五百五十ドルの価格でもって、学校建設用に喜んでうってくれたのである」とデイヴィスは書いている。

面積は五エーカー半、「六千五百坪」の「屋敷」で、その値段は「五百五十ドル」であった。この時点で二本松屋敷の建物がこのついでなのかどうかは判然としない。「島津三郎」とは島津久光のことであり、所有者の山本とは京都府顧問の山本覚馬であった。この土地は、新島の名義で購入されたが、資金はアメリカン・ボードからでている。

『同志社百年史』では「二人は河原町御池下ルに住んでいた山本覚馬を訪ね、彼が所有していた旧薩摩屋敷あとの桑畑を校地として譲りうけることの承諾を得た³⁵」と書いている。ここでは「桑畑」とあることに注意したい。この指摘にもとづくと、藩邸は桑畑になっていたことになる。とはいえ、屋敷跡の全域が「桑畑」に転用されていたのかどうかはわからない。

小枝弘和氏によると、明治維新後にも薩摩藩出身者がこの藩邸に住んでいた。その一人が池田春苗である³⁶。竹内力雄氏は、この藩邸は明治五年九月末に池田春苗を代表とする薩摩藩出身者五人の所有となり、明治七年に開拓会社の所有にかわり、明治八年六月に新島が購入

した。この屋敷を薩摩藩出身者が手放す際に、山本覚馬と接触して開拓会社へ世話してもらった可能性に同氏は言及している⁽³⁷⁾。要するに、山本が所有していたという事実はなかったことになる。

第六章 同志社英学校の開校

同志社英学校は、明治八年（一八七五）十一月二十九日に寺町丸太町上ル松蔭町の高松家屋敷で開校し、教師は新島とJ・D・デイヴィスであった。

この屋敷はこの時点では公家の高松家の所有となっていたが、それ以前には中井家の屋敷であった。中井家は、畿内と近江の大工支配を家康から任せられた家で、幕府や朝廷の建築物を造営し、宝永五年（二七〇八）からここに居住しはじめた⁽³⁸⁾。喜多川守貞は、「今世、京都中井氏を大工頭と云ひ、番匠の長とす。京坂等の大工はこの中井氏に請ひ鑑札を得ざる者は、これを業とする事を許さず。鑑札を得るには、金をもつてするなり⁽³⁹⁾」と書いている。

高松家は本来的な屋敷のほかに、中井家屋敷を新たに入手したのであろう。言い換えれば、寺町通の東側で土地所有の変化が生じていたのである。新島はそこを借りて、同志社英学校を開校した。後に、新島は、アメリカ合衆国の友人からの資金で明治十一年（一八七八）にそこに自宅を建てている。図一の「新島襄邸」がそれである。高松家にはこの土地を所有し続ける意思はなかったと解される。

二本松屋敷跡に最初の三棟が建ったのは、明治九年（一八七六）であった。『新島襄全集—教育編⁽⁴⁰⁾』の口絵と、河野仁昭氏の『キャンパスの年輪—同志社今出川校地—』⁽⁴¹⁾に、その写真が掲載されている。河野氏によると、これらは「第一寮、第二寮、および食堂の三棟」でそ

の献堂式は「明治九年九月十八日」におこなわれ、同時に熊本バンドの歓迎会も開催された。第一寮と第二寮の一階が教室で二階が学生寮である。三棟の位置は、「いまのクラーク記念館のあたり」で、「相国寺門前の桑畑の一隅に、（中略）洋風の木造校舎が、同志社最初の校舎になった⁽⁴²⁾」のであった。二本松屋敷跡はし字状であった。その東南隅から北にのびる外郭線は相国寺の参道に沿っている。この外郭線の近くで、北寄りにこれらの三棟は位置していた。この当時の校門は「相国寺門前通りに面して開かれ⁽⁴³⁾」ていた。つまり、門の位置をもとに判断すると、この頃のキャンパスは東向きだと見なされる。新島のキャンパス創造は、二本松屋敷跡の東端部から始まったのである。逝去の前年、明治二十二年（一八八九）十二月三十日に、大磯から同志社学生の横田安止に、病床に伏した新島が送った手紙のなかで、「心は日夜、相国寺門前に飛ぶも、身は病魔の一囚人となり、東京にすら止まる事叶わず⁽⁴⁴⁾」と書いている。新島は逝去の前年でもキャンパスを「相国寺門前」と認識していたことがわかる。

最初の三棟は木造であったが、同志社では複数の煉瓦造りの建築物が偉観を呈していることとつとに有名である。表一は、同志社における建築物のうちで、煉瓦造りの建築物十棟と現存しない木造建築一棟を示している。前者で最古のものが、明治十七年（一八八四）竣工の彰栄館である。その建築に要する資金はアメリカン・ボードから提供された。この頃には、ここで創出されている建築物を、アメリカン・ボードは「トレーニング・スクール」（伝道師養成所）であると思なしていたのであろうか。後に大学設立に向けて新島は国内でも募金活動をおこなった。そのための「同志社設立始末⁽⁴⁵⁾」は明治十六年に新島が書き、明治二十一年に印刷されて小冊子となった。その表紙に彰栄館が描かれている。宣伝には最適の建築物である、と新島は認識してい

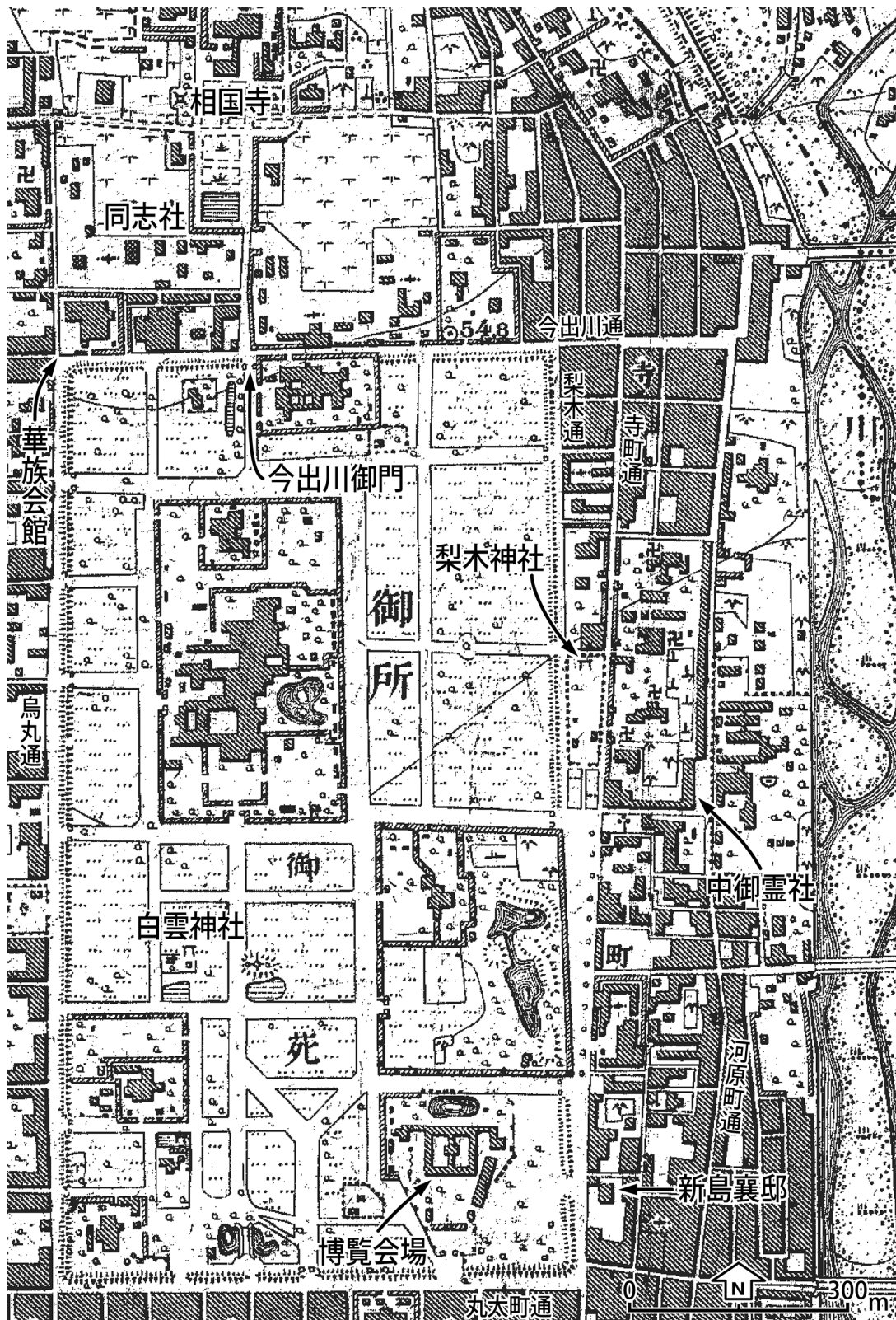


図1 明治22年（1899）ころの京都御苑とその周辺
 使用図幅：20,000分の1 仮製地形図「京都」（明治22年測量）
 出典：河島一仁「京都における大学の歴史地理—京都御所の周辺地域における変化—」、立命館文学、645号、立命館大学人文学会、2016、231頁。

たにちがいない。

明治十九年（一八八六）には、表一の2、煉瓦造りの礼拝堂がアメリカン・ボードの資金で建てられた。礼拝堂と他の木造の学寮などの、つまり明治十九年頃のキャンパスの景観を、デイヴィスが版画で表現しているが、彰栄館はフレームの中にはなぜか含まれていない。この版画は、デイヴィス著『新島襄の生涯』⁽⁴⁶⁾と『キャンパスの年輪——同志社今出川校地——』⁽⁴⁷⁾に掲載されている。烏丸通から東方をみて、左端寄りに遠景の比叡山を描き、南に続くその稜線は次第に低くなっている。手前を見ると、右隅から石橋通りが東にのびている。石橋通りとキャンパスの間には溝があり、その内側には柵がある。この時も、キャンパスの南縁が二本松屋敷のそれであった。河野氏は「石橋通り沿いの柵の中程に立っている電柱の傍らに、通用門がある。（中略）この通用門から今出川通りへ細い道が抜けていた。（中略）古地図から察して、この通用門あたりに薩摩屋敷の表門があった」と述べている。掲載されている版画のサイズが小さいためか、電柱を識別することは難しい。しかし、柵の外の溝をみると、一か所だけ、石か板がかかっている。これは渡る人のための配慮にちがいない。つまりここが河野氏という通用門である。通用門から今出川通りにつながる細い道があった。

アメリカン・ボードの資金で煉瓦造りの建物が陸続と建てられていくが、敷地外の道路の位置がかわっていないので、二本松屋敷のかつての表門が通用門の位置となっていたと思われる。⁽⁴⁹⁾

表一の3、看護婦の養成学校と病院は、蛤御門とは烏丸通を隔てたところに位置していたが現存しない。4から11までは、部分的に鉄骨も用いた10も含めて、すべて煉瓦造りである。5・6・7・10は寄附者ならびに大学の名称を建物のそれに用いている。二本松屋敷跡の購

表1 同志社における建築物—煉瓦造を中心に—

名称	竣工年月日	資金の拠出	構造
1 彰栄館	明治17年9月15日	アメリカン・ボード	煉瓦造二階建 (D.C.グリーン)
2 礼拝堂	明治19年6月25日	アメリカン・ボード	煉瓦造一階建 (D.C.グリーン)
3 京都看病婦学校 同志社病院	明治20年夏	アメリカン・ボード	木造二階建二棟、木造平屋六棟
4 有終館（初代図書館）	明治20年11月15日 （開館式）	アメリカン・ボード、 その他	煉瓦造二階建 (D.C.グリーン)
5 ハリス理化学館	明治23年7月	J.N.ハリス（実業家）	煉瓦造二階建 (A.N.ハンセル)
6 クラーク記念館	明治26年末	B.W.クラーク夫妻	煉瓦造二階建 (R.ゼール)
7 ジェームズ館	大正3年8月	ジェームズ家	煉瓦造二階建 (武田五一)
8 啓明館	大正4年9月20日（書庫）、 同9年3月（本館）	校友の山本唯三郎	煉瓦造四階建 煉瓦造一階建
9 致遠館	大正5年3月	校友など日本人の寄付	煉瓦造二階建 (W.M.ヴォーリス)
10 アーモスト館	昭和7年5月	アーモスト大学卒業生	煉瓦およびRC造り二階建 (W.M.ヴォーリス)
11 新島先生遺品庫	昭和17年2月	校友の池田庄太郎	煉瓦造一階建 (W.M.ヴォーリス)

資料：1）河野仁昭『キャンパスの年輪——同志社今出川校地——』、同志社大学出版部、1985。

2）前久夫・日向進『京都の赤レンガ—近代化の遺産—』、京都新聞社、1997。

注：名称、竣工年月日、資金の拠出に関しては1）に、構造に関しては2）に依っている。ただし、3に関しては1）のみに基づいている。7は同志社女子大学のキャンパスに位置している。なお、構造の欄には設計者の名も記載した。

入資金、ならびに1〜4の建築資金がアメリカン・ボードのそれであり、新島自身もそこから給与を得ていたことも踏まえると、この景観を創出したのは新島ではなく、実態的かつ実質的にはアメリカン・ボードであったと見なすことは誤りであろうか。

新島は、明治二十三年（一八九〇）に死去している。したがって表一にある十一棟のうちで、彼が見たのは1〜4に過ぎず、そのうちで二本松屋敷跡の煉瓦造は三棟である。図一は明治二十二年測量の仮製地形図である。二本松屋敷跡には十四、五棟の建物が位置している。つまり、この屋敷跡には木造の建物も位置していたのであった。この地図をもとに、新島が構想した空間デザインを精細に検討することはできないが、二本松屋敷以来の南縁の道にはほぼ平行する道を東西にひいて、その道の両側に建物を対峙させている。東方の伏見宮家と二條家の跡には同志社女学校の建物が分布している。

アメリカン・ボードは、伝道を使命とする宣教師を日本に派遣した。新島はその一人であったので、彼はアメリカン・ボードからの給与で暮らすことができたのである。明治十一（一八七八）年八月に、ハーデイ夫妻に送った手紙には、「自宅ではお手伝いさんを何人か雇っています⁽³⁰⁾」と書いている。アメリカン・ボードからの給与で、新島は複数の家事労働者を雇うこともできた。

第七章 柳原前光邸と同志社女学校

校地とは別に、「新島は、デイヴィスの住居を確保するために奔走しなくてはならなかった。ようやく御苑の中の華族柳原前光^{やなぎはらのまひろ}の広大な屋敷（中略）を借りることに成功した」と『同志社百年史⁽³¹⁾』は記述している。「柳原は東京遷都で天皇に従って東京に移っており、その

広い旧宅があきやであった」こと、ならびに「八年間無人であったため、畳は朽ち、床や敷居もいたみがひどかった⁽³²⁾」が、修復してデイヴィス一家が柳原邸に入ったのは、十月十九日であった。『同志社百年史⁽³³⁾』には月日はあるが何年の事かはわからない。明治九年（一八七六）一月三日に、デイヴィス宅で新島と山本八重は結婚式をあげているので、デイヴィス一家の柳原邸での居住開始は明治八年（一八七五）のことであった。

明治八年十月一九日にデイヴィス一家が柳原邸に住み始め、また「八年間無人」であったという記述ももとにすると、「八年間」とは慶応三年（一八六七）十月から明治八年十月となる。しかしこの「八年間」は明治元年から明治八年までということかもしれないが、東京奠都は明治二年のことである。そうであれば、柳原は東京奠都以前に東京に転居していたのであろうか。明治の初めころから、柳原邸は無人になっていたのかもしれない。

明治九年（一八七六）四月には、アメリカン・ボードから派遣されたアリス・J・スタークウェザーが京都に着き、「旧柳原前光邸に身を寄せ⁽³⁴⁾」た。『同志社百年史⁽³⁵⁾』には「この邸宅は五〇以上の部屋があり、彼女はその中の庭に面した最も美しい部屋三、四室を使用して女子教育を開始⁽³⁶⁾」したとある。こうして明治九年（一八七六）十月に、デイヴィス宅で同志社の「女子塾」が開設されたのである。明治十年（一八七七）に、女子塾は女学校となる。

京都御所の周辺には多数の宮家・公家の屋敷が位置していたが、明治八年頃には、柳原邸に限らず、多くの公家屋敷が空き家になっていた。アメリカ人一家が京都御所の近くに住めたのは、そのことに反対するような人々が近隣にはもはやいなかったからである。京都御所の周辺は空洞化しつつあった。

河野仁昭氏によると、薩摩藩邸の跡地に「移転以後、新島は募金などによって校舎や寮を建てただけでなく、御所周辺に売地があると、無理算段をして購入につとめ」、明治九年に、薩摩藩邸の東方で今出川通に面する「旧二条邸の敷地の一部」の「四、九六九坪を」女学校用に買い入れている。⁵⁸⁾そして、明治十一年（一八七八）年九月に女学校はデイヴィス宅からそこへ移転した。⁵⁹⁾つまり女学校が創設以降に位置した地面は、いずれも公家屋敷跡であった。

第八章 京都御苑の創出

柳原家が位置していた京都御所の周辺は、その後に劇的に変化する。それをもたらししたのは「大内保存事業」であった。伊藤之雄氏によれば、『大内』とは、京都御所のこと、『大内保存』とは、京都御所を保存する一方で、それと関連する御苑も御所に調和する形で創出・整備していかうというものである。⁶⁰⁾

森忠文氏は「大内保存事業は、御所の保存を目的として、周辺の土地を買収し、建物を撤去して御所への火災延焼のおそれをなくするとともに、四周に石垣土塁を巡らし、門を移設し、道路を設け、ある程度の修景植栽等を行なったものであった。実施期間は明治十年より二十一年までの予定であったが、保存費の繰上げ交付によって促進され、明治十三年には当初の構想に追加分を加えたものほとんど大部分を完了した」と述べている。御所を火災から守って保存し、「石垣土塁」を今出川通、梨木通と寺町通、丸太町通、そして烏丸通に沿って築造して範域を明確にした。九門のうち乾御門、中立売御門、蛤御門、下立売御門、堺町御門、石薬師御門、清和院御門の八門を通りに面するように移設し、寺町通りに面していた寺町御門を北に動かした。

成川敏郎氏によると、「明治十年一月、たまたま京都市幸中に西南戦争にあわれた明治天皇は、そのまま京都に滞在、御所と公家町の荒廃に驚かれ、直ちに宮内卿を通じて京都市知事に対し、御所の保存、防災を実施するように御沙汰され」て、金四千元が明治二年まで給付されることになり、それをもとに京都府は「大内保存事業」を進めたのであった。⁶¹⁾図一は本来の縮尺が二万分の一の仮製地形図である。この図に最初から記載された文字は「御所」、「御苑」、「寺町」の三つだけで、その他は筆者が加筆したものである。今出川通、烏丸通、丸太町通、寺町通、梨木通に囲まれた範囲では、外縁に沿って土塁が設けられている。禁裏すなわち京都御所、大宮御所、そして仙洞御所はこの図でも確認できる。今出川御門に近い桂宮、烏丸丸太町の東北角の閑院宮、その北に位置する嘉陽宮などの宮家の建物は残っているが、そのほかの宮家・公家の屋敷は姿を消した。西園寺家の屋敷内にあった白雲神社は残っている。新たに創出されたものとして、御苑の南東部にある博覧会場やその西隣にある観象台などがある。御苑の東側を見ると、上御霊神社の御旅所であった中御霊社はすでに廃されているが、三条実美をまつる梨木神社が新たに創出されている。

京都における博覧会について、京都市歴史資料館の資料によると、京都で日本最初の博覧会が、明治四年（一八七一）に西本願寺で開催された。これを機に、京都府と民間によって創設された京都博覧会社が、明治五年に西本願寺・建仁寺・知恩院を会場として第一回京都博覧会を開催した。京都博覧会社（のちに京都博覧協会と改称）主催の京都博覧会は、昭和三年（一九二八）年までは毎年開催された。第二回から第九回までの会場は大宮御所・仙洞御所であったが、明治十四年（一八八一）の第十回から、京都御苑内東南の一角に建設された常設の博覧会場が使われた。明治三十年（一八九七）には岡崎に博覧会

館が建設され、大正三年（一九一四）以降に岡崎の京都市勧業館が会場となった。

図一で二本松屋敷跡をみると、同志社の複数の校舎が建っていることがわかる。それらには京都市内で現存する煉瓦建築としては最古の明治十七年（一八八四）に建てられた彰栄館も含まれる。竹内家と徳大寺家の屋敷跡と思われるところに、明治十二年（一八七九）に建てられた華族会館が位置している。今出川御門から西を見ると、同志社の敷地は今出川通には達していないことがわかる。

この頃には、今出川通の北側でも、変化があつた。河野仁昭氏は「明治維新後、二条邸は西隣の伏見宮邸とともに宮内省に移管され、明治十六年十月に設立された平安義鬘に貸し下げられた」と述べている。「平安義鬘」は、「公家社会出身でありながら華族」になれなかつた「官家士族」の子弟の教育を目的とした。⁽⁶⁶⁾

すでに述べたように、明治九年に二條家の敷地の一部を同志社は買い入れ、明治十一（一八七八）年九月に女学校は柳原邸のデイヴィス宅からそこへ移転した。宮内省に移管された二條邸と伏見宮邸は、明治十六年十月に設立された平安義鬘に貸し下げられた。すなわち明治二十五年当時に、伏見宮邸と二條邸の範域で、同志社と平安義鬘のそれぞれの敷地が併存していたと解される。そのほかに明治二十二年には、寺町通り鞍馬口下ルにあつた彦根藩邸跡を同志社は購入している。⁽⁶⁷⁾

御苑における学校の立地について二つの事実がある。京都府師範学校は「明治九年六月二日京都御苑内旧准后里御殿を以て仮校舎として」開校した。この「校舎は京都御所御苑内石薬師御門内（中略）に在つて雲の上の人々が産声をあげたといふ由緒ある結構審美なる御殿」であり、その部屋を教室として使用した。その後、明治十二年

（一八七九）に下立売釜座の旧会津藩邸跡に新しい校舎が竣工し、そこに同校は移転した。

明治十一年に京都画壇の望月玉泉、幸野楳嶺、久保田米僊、巨勢小石らは画学校の創設を榎村知事に願ひ出た。その「画学校開学建議書」⁽⁶⁸⁾は、京都御苑内に「博覧会場新築ノ挙アリト果シテ然ラバ画ヲ学ブノ地ハ是レニ若クハナシ其中ニ就テ起校ノ挙ヲ被許」とある。「其中」を字義どおりにとれば、博覧会場のなかに開設することを提案したということであろうか。当時の京都画壇の指導的立場にいた画家たちは、博覧会場が適地だと考えていたようである。それが立地するのは御苑であつた。

明治十三年に京都府画学校は京都御苑内准后里御殿を仮校舎とし、明治十五年に暴風のため破損し河原町の織殿内に移転し、さらに明治十八年には河原町の元勧業場跡に移転した。明治二十二年に同校は京都市の経営となり、名称が「京都市画学校」に変わり、京都御苑内の博覧会東館に移転した。⁽⁷⁰⁾

九門の内側は、御所を除いて明治三年（一八七〇）に京都府の所管となつていたので、師範学校と画学校は、府知事の判断でそこに立地できたと解される。なお、御苑が一八九〇年代以降も人々に開放された空間でありつづけたことを伊藤之雄氏が論証している。⁽⁷¹⁾

第九章 所有地の拡大

同志社の所有地の拡大過程に関して、橘愛治氏の報告がある。⁽⁷²⁾同志社の所有面積は、明治八年には五、八〇五・七坪であつたが、明治十七年（一八九四）にはその約六倍の三四、九八三・六七坪に増加した。明治八年にはし字状の二本松屋敷跡だけであつたが、明治十年

(二八七七)には二つの変化がある。第一に、上長者町通り烏丸西入ル元浄華院町に五三〇坪を取得している。この地筆は、二本松屋敷跡からおよそ八百メートル南で、烏丸通り以西に位置している。後にこの地筆は、表一にある京都看護婦学校ならびに同志社病院の敷地に含まれた。⁽⁷³⁾第二に、前章でみたように二本松屋敷跡から東方で、今出川通り沿いの常盤井殿町の二つの地筆が同志社の所有となった。これらは五撰家に含まれる二條家の屋敷跡である。同志社女学校は柳原邸からここに移転した。

同志社女学校の広告には、「校ハ、(中略)土地広豁、校ノ正南ニハ御苑ノ設アリテ空気が通暢極メテ好ク、学校舎清潔且市中熱鬧ノ地ニ遠カリ静閑ナルヲ以テ勉学ニハ佳適ノ所ナリ」と書いている。⁽⁷⁴⁾明治天皇が御所周辺の整備を指示したのが明治十年である。その翌年には「御苑」という語が一般に使用されていたことがわかる。

新島襄が逝去した明治二十三年(一八九〇)には、所有地は二万六千坪余りとなっている。烏丸通り以西では、北は上立売東町、南は元浄華院町までの間に所有地が分布するようになった。東方を見ると、伏見宮の屋敷跡にも所有地が増えている。冷泉家の東隣にあった山科家のように、今出川通りに面する地筆も同志社のものとなった。

京都御苑の東方で、寺町通りと梨木通りに挟まれた染殿町にも一八三六坪を所有している。同志社英学校を創立した明治八年から明治二十三年までに、新島はこれほどの土地を手に入れたのであった。その分布をみると、それらは御苑の外縁部に位置している。言い換えると、土地所有の点で新島が京都に与えたインパクトは、御苑の附近に限定されていた、ということができる。

新島は、今出川通りから南方へ所有地を拡大させようとする企図を抱いていなかったのであろうか。たとえそれを抱いていたとしても、

御苑ができたことでそれは阻まれたのか。京都府師範学校と京都府画学校は京都府知事横村正直の判断で、御苑内に残る御殿で開校している。私学の同志社は御苑から排除された、と見なせるのかもしれないが、今後の検討課題としたい。

生前の新島襄に関して、第七章ですでに言及したように、河野仁昭氏は「新島襄は校地の拡張にはずいぶん力を注いだらしい。御所の周辺に売地があると、かなりむりをしても購入につとめたようだ。あまり知られていない新島の一面である」と述べている。⁽⁷⁵⁾河野氏によると、同志社の「校地が売却されるのは明治四十二年以降で、専門学校令による大学開設の基金をえるためであった」。昭和二年(一九二七)には、多くの宣教師館が、岩倉での土地の購入のために売却された。

第十章 排耶と同志社

新島がキリスト教主義の学校を創出しようとした際に、京都の仏教界が強く反対した。キリスト教に対する攻撃は「排耶」と呼ばれている。この動きは同志社に対してではなく、また京都に限定されたわけでもなく、全国的に展開した。排耶の中心的な役割を果たしたのは、浄土真宗の大谷派と本願寺派であった。大谷派の僧侶・安藤劉太郎はキリスト教の動向を探るべく横浜で宣教師に接近し、一八七二年に偽装して洗礼を受けている。⁽⁷⁶⁾また本願寺派の僧侶・正木護は、長崎や横浜でキリスト教信者や宣教師に近づき動向を調査した。⁽⁷⁷⁾要するに安藤や正木は「密偵」であり、強い使命感で潜入し、キリスト教に関する情報を収集した。彼らはそれぞれの本山とつながっていたはずである。

星野靖治氏によると、現在の京都市下京区に位置する大谷派円光寺

住職で同派の学僧であった樋口龍温は、香港で刊行された漢文の聖書を用いてキリスト教を研究していた⁷⁸。彼もまたキリスト教に強い警戒心を抱く僧侶の一人であった。大谷派は、文久二年（一八六二）に「龍温を耶蘇防禦掛に任命」した。一八六八年には「護法のために宗学以外の学問を修める機関である護法場を設立した際に、龍温をその最高責任者の一人とし、そこでキリスト教の教義と歴史について考究していた」のであった。本願寺派の僧侶育成機関である「学林も、一八六九（明治二年）年にキリスト教について学ぶ『破邪学』を開講していた」。日米修好通商条約が締結されて以降に、キリスト教の宣教師による伝道に、浄土真宗の大谷派と本願寺派は強い危機感を抱いていたのであった。

仏教勢力による排耶の運動について、坂口満宏氏は「排耶書の普及と結社ならびに講談活動」を中心に考察を加えている⁷⁹。同氏は排耶書として明治十四年刊行の『耶蘇教国害論』⁸⁰と『耶蘇教の無道理』⁸¹を例示している。前書の「編輯兼出版人」が「堺区九間町東二町」に住む斎藤吾一郎である。その冒頭には「余は坊主でもなく神主でもなし、故に固より何づれの宗教に偏倚らず、又未だ何づれの宗教の善なるをも知らざれども、唯切支丹宗即ち耶蘇教に限りて其不善なるを知らば、我が御国を愛する丹心より聊か茲に論せねばならぬ者あり⁸²」とある。斎藤が何者かはわからないが、彼の住所は本願寺の堺別院にほど近い。

『耶蘇教の無道理』の著者は、本願寺派の僧侶でフランス留学の経験がある藤島了穩である。書き出しには「近ごろ世の中に人のよしとかあしとかいひはやす耶蘇教といへるは、三百年ほど昔に一たびこの御国すなはち日本にひろまりし切支丹といひしものにて」とある。この書は三分冊からなり、第三編の奥付を見ると、藤島了穩は「近江国

阪田郡南方村」に居住し、出版人は下京区烏丸松原下ル五條烏丸町に住む布部常七である。「印施主」は「大坂有志同行」、「配達所」は「西京西六條東中筋花屋町上ル」にある「弘教講社」である。坂口満宏氏によると、この刊行のために寄付を募り、弘教講社が無料で配布したもので、「一連の反耶蘇、仏教興隆を目的とした真宗の有志結社が一丸となって発案し、生み出した作品である⁸³」と指摘している。

弘教講社は「明治八年頃に其の起源を発⁸⁴」している。明治十四年講社内約を定め、五ヶ国に支部説教所七ヶ所を設立し、信徒五千有余戸、二萬幾千人の大団結を形成せり。斯くて講社の人々は大教校建築、東京築地別院再建、隠岐開教の際等には、数年に亘り、多数の人を出して尽す所⁸⁵」があった。

坂口満宏氏によると、一八八〇年代には排耶の結社活動は全国的な規模で展開するようになった⁸⁶。結社には二類型がある。第一に広域的に支社・会員を有する結社で、前掲の弘教講社がそのひとつである。第二に、地域社会密着型の結社があり、民衆とキリスト教を隔絶することを企図して、キリスト教の布教活動を妨害した。このような結社の数も浄土真宗系が最多であった。

キリスト教の説教活動に対抗するために、大谷派は明治十四年（一八八二）に「仏教講談会」を組織した⁸⁷。その本社は京都に置かれ、全国的に演説会を開催し、キリスト教を非難し、先祖代々の仏教を護持すべきことの妥当性を説いたものと思われる。このように浄土真宗を中心とする排耶の運動は全国的に展開した。

福井純子氏によると、宗門の仏教講演会とは別に交詢社・杞憂会などの団体による演説会が開催された。明治十四年（一八八二）六月の交詢社の演説会に参集した千二百名のうちには浄土真宗の僧侶が多かった⁸⁸。一方、同志社は明治十三年（一八八〇）九月以降も、京都市

内で演説会を続けていた。このような状況のなかで、同志社の学生と宣教師のグリーンは次のような攻撃にさらされた。同志社の学生である池袋清風の記事には次の記述がある⁸⁹⁾。

明治十七年五月二十三日、清風はグリーンから二十二日の夜にあった事件について聞いた。大宮通の寄せ場での説教会でのことである。同志社の学生三名とグリーンが説教をおこなった。そこには二三百の聴衆が集まっていた。一人目の学生の時には聴衆は静かであった。しかし、二人目の学生に対しては「嘲哂悪口」があり、三人目の時には聴衆が騒いだ。グリーンに対して一人の僧侶が質問をし、グリーンがそれに答えている最中に、他の僧侶が先の質問に「賛成」と声を上げてから場内は騒然となった。二人目の時に呼んでいた警官が、終息させるべく尽力した。

五月二十三日、午後八時から前日と同じ大宮通りの寄せ場で説教が始まった。一人目に対して「聴衆ハ稍静カナルモ猶悪口」を言い、僧侶がそれを「慫慂」した。二人目の時には騒然となり、「吐気ノ声ヲ揚ケ去レタト言ヒ」、説教はできず、四人目にいたっても説教のできる状態ではなく、結果的に閉会としたが聴衆は去らなかつた。「耶蘇ヲ殺セトカ撃テトカノ声」が止まなかつた。同志社の人々はやつとの思いで外に出て帰路についたが、途中で待ち伏せされ、石や瓦礫を投げつけられて出血する者もいた。ここに登場する僧侶に関して、「法衣ヲ着シタルモ仏教ヲ知ルニ非ズ」と清風は書いている。

この頃、新島はA・ハーディから提供された資金で、静養のため「イタリア半島に上陸し」、「ナポリ、ローマのあたりを旅行してい」⁹⁰⁾た。

京都の仏教界のすべてが同志社にたいして厳しく対応したわけではなかつた。河野仁昭氏は、「わたくしには不思議に思われることがい

くつかります。その一つは、禪宗の大本山相国寺と同志社の関係であります。相国寺と同志社の間にトラブルがあったという記録を現在までのところわたくしは見えておりません」と述べている。さらに「総門に隣接して耶蘇教の学校に校舎を建てられては、おそらく目障りで仕方なかつたでありましょうし、相国寺は大本山でありますから、同志社の生徒とおなじぐらいの年ごろの修行僧がたくさんいただろうと思うのですが、同志社の妨害をしたとか、生徒との間にトラブルがあったというような記録もなければ証言もないのであります」と指摘している。

宗派によってキリスト教への対応はさまざまであった。また浄土真宗だけが排耶運動をおこなったわけではないことも踏まえたくて、浄土真宗が積極的であったことに関して、柏原祐泉氏は第一に、「弥陀一仏に帰依する一向性と、キリスト教の唯一神信仰との外見的類似性の問題」があり、第二に「他宗のような寺領などをまったくもたず、全教団の経済生活が専ら檀家組織に依存する真宗の場合は、キリスト教との対決は、宗門改制を固守するというたんなる政治的感覚からのみならず、檀家制度の維持に利害関係が痛切にからまっていたから」であり、第三に「幕末のキリスト教が科学的宇宙観」地動説と結びつき、それによって仏教的宇宙観「須弥山説を否定した事情がある。この場合、とくに打撃をうけたのは実体的なかたちで地獄極楽思想を説いていた浄土教であった」と指摘している⁹²⁾。

浄土真宗を主とする仏教とキリスト教の対抗関係はやがて鎮静化した。柏原祐泉氏は「仏教側のキリスト教批判は表向きには影をひそめた。それは、キリスト教自体が国家体制に接近し、土着化、日本化に努めたことにもよるが、明治後期になると、やがて仏教自体が近代的な学問や宗教のあり方に急速に目覚めていったことによる点が大き

い⁹⁸」と述べている。檀家制度の維持をゆるがすほどにはキリスト教は信者を獲得できなかったことが鎮静化の要因のひとつではなかったか、と筆者は推定するが、その根拠を見いだせていない。

第十一章 欧化主義と北垣国道

仏教との対抗関係はあったというものの、明治十七年（一八八四）ごろから同志社をめぐる状況に変化が生じた。太田雄三氏によれば、明治政府の首脳は不平等条約の改正のためにキリスト教への態度を急変させた⁹⁹。それにともなう欧化主義の風潮が同志社の発展に有利に働いた。英語で授業がおこなわれ、教育内容が西洋一辺倒であったので、この時期には人氣がでも不思議ではなかったのである。このような時代思潮とともに、京都府知事が明治十四年（一八八一）に横村正直から北垣国道に代わったことが同志社には益をもたらした。

高久嶺之介氏は、北垣に関して、「北垣は西洋文明に伴うキリスト教に対しても抵抗感を持っていなかった」し、「キリスト教に寛大」で、「明らかに北垣は、京都のキリスト教徒たちに偏見を持っていなかっただけではなく、むしろ信頼感さえ持っていたことが伺い知れる⁹⁵」と指摘している。

北垣と新島との関係で重要なことは、大学設立運動を北垣が後援したことである。「京都府下有力者からの後援は、北垣の力もあってひとまず成功を収め」た。北垣は政府高官への働きかけにも協力し、「北垣が身内の運動として意識していた様相も伺える」と高久氏は書いている。「北垣が同志社の教育で期待をかけたのは（中略）理化学教育ではなかったかと思われる」とも同氏はいふ。つまり、いいかえれば、宣教師の新島が本来的に担うキリスト教の布教そのものには、

北垣はさほど関心をもたなかったということであろうか。

高久氏によると、北垣の二人の娘は、後の同志社総長の下村幸太郎と琵琶湖疏水の立案から創出までの多大な貢献をした京都帝大教授の田辺朔郎に嫁している。北垣は、明治二十五年（一八九二）に京都府知事を辞し、北海道庁長官、貴族院議員などを歴任し、大正五年に上京区で歿している。府知事として府域の全体を視野にいれて実務にあたったことは当然ながら、自らが強力に開発をすすめた鴨東における琵琶湖疏水、第三高等学校などを思い浮かべ、自身が協力した同志社の発展を見通しつつ晩年を過ごしたのであろう。

北垣をはじめとする有力者の支援を得て、同志社の声望はたかまっていた。明治二十八年（一八九五）刊行の『京華要誌』⁹⁶の「学校」の章の冒頭では、京都が維新後に教育に力を入れてきたことを明記し、特に学制が公布される以前に、町組によって創出された小学校について「其建造の宏麗なる。器具の善美なる、殆ど三府に甲たり」と強調している。それに続いて上京区に二十八校、下京区に三十三校の小学校があることを記し、第三高等学校、府立尋常師範学校、府立尋常中学校、府立高等女学校、府立医学校、府立京都商業学校、市立の盲啞院、染織学校、上京高等小学校、下京高等小学校と続き、最後に同志社学校が登場する。

同志社学校に関して、「全国私立学校中の錚々たる者にして、故新島襄が故山本覚馬と結社し、米国伝道会社宣教師デビス氏等の賛助を得て、明治八年十一月に創立せるものなり。其後明治廿一年に至り、同志社大学設立の趣意書を発し、広く内外有志の資金を募集し、同志社大学の基礎、始めて成る」と書き、同志社の普通学校、神学校、女学校、予備学校、看病婦学校、波里須理科学校、政法学校を列記している。

『京華要誌』は、明治二十二年（一八八九）に発足した京都市の参事会が刊行したものである。東京奠都にともなう打撃をうけながら、京都はここまで復興し発展してきていることの明示を京都市当局は企図していた。そのなかで同志社大学の設立を見通しながら、私立の同志社が創設した七校を列挙している。アメリカン・ボードの資金ならびに関係のアメリカ人からの寄附で出現した煉瓦造りの複数の建築物は、京都の復興と発展を顕示するには格好の景観であったので、『京華要誌』で同志社は言及するに値する、と京都市当局は考えたのであろう。

煉瓦造りの建築物に対して一般の人々はどのような眼差しを向けていたのだろうか。それを知る手掛かりは、昭和三年（一九二八）刊行の『京とところどころ』に載る田辺朔郎（一八六一―一九四四）の随筆である。

「疏水

『一帯青松道不迷』

見事なこの松林が壊さる

疏水工事と当時の人々の無智

工学博士 田辺朔郎

（中略）今日では赤煉瓦は至るところにあるが、今から四十年前も前の明治二十年頃には煉瓦を知つて居る人は甚だ少く、パン瓦と称して、土器のような土を焼いた、もろいものと思つてをつた。だから疏水工事のトンネルで、岩を打壊してその跡へパン瓦で積み上げることが腑に落ちなかつた人もある。」⁽⁹⁾

明治二十年頃には 一般の人々は煉瓦を知らなかつたのである。田

辺はそれを「無智」と書いている。エリート臭い見下した表現がいささか気になるがそれはさておき、二本松屋敷跡に陸統と建つ煉瓦建築に、煉瓦それ自体を知らない人々は、驚きの眼差しを向けていたのではないか。文明開化を強く認識したにちがいない。そして、昭和三年には「赤煉瓦は至るところにある」と田辺は書いている。明治以降における京都の都市景観は大きく変貌したのであった。

第十二章 周辺地域の変化

二本松屋敷跡から新島によるキャンパス創造がはじまり、その後に所有地が広げられていった。キャンパスは塙で囲われているが、その立地は敷地のそとの周辺地域に変化をもたらした。『京とところどころ』には、その状況が記述されている。

「今出川

花の御所の旧跡や文人墨客の淵藪

竹藪が切り開かれて学校が建つ

昔を偲ばせる冷泉伯郎

宮内省図書寮嘱託 神田喜一郎

京都も私の住む室町今出川の辺は、今でこそ電車の便利もよく何かにつけて開けてきたので、時には住宅地として好適の場所柄ですななどとお世辞の一つも聞く様になつたが、ここ二十年も以前はなかなかさうではなかつた。（中略）余りの激しい変遷にさすがに感慨のいひ知れぬものがある。その最も著しいのは何といつても相国寺の竹藪が次第に切り拓かれて今では往時の面目を全く失ってしまったことであ

る。例へば烏丸今出川の辻を北に上ること二丁、上立売に至つて烏丸通は尽きてゐたが、その北方、即ち今の市立工業学校の辺は一帶に竹藪であつた。⁹⁸⁾

この随筆には「今出川」という題がある。「室町今出川」に住む神田喜一郎氏は、消滅した「竹藪」の最も顕著な例として「相国寺の竹藪」をあげている。位置的には同志社が位置する南側ではなく、北側のことである。そのさらに北方でも二十年以前には「竹藪」が目立っていた。

「烏丸上立売

藪を拓いて町に

目ざましい発展ぶり

三十年來の窓

画家 太田喜二郎

(中略) 土族屋敷は普通桑畑となるに定まつてゐるが、桑よりも手数⁹⁹⁾の要らぬ荒地利用は竹藪である。市中の藪は衰運の記念物で、藪の宏がる勢は旺盛なもので家の建つたまま床板も畳も突き抜いて筍が出るから、荒廃には大いに手助けとなる。血なまぐさい薩摩屋敷の跡に同志社が建つてからも藪は衰運を恣にしてゐた。

(中略)

道路が出来、電車が通つてからは市立工業学校、染織試験場、成安女子学院が建ち、同志社も大学、高官が出来て目醒める様な発展である。従つてうどん屋、パン屋、食堂、菓子、煙草のペンキ看板が手をつなぎ、二階では下宿人が机を並べ凡そ一ヶ月何程あれば生きて行けるかは一目解決する便利な町となつた。⁹⁹⁾

画家の太田喜二郎氏(一八八三—一九五二)は、逆説的な言い方で竹

藪が「衰運の記念物」と書いている。二本松屋敷跡に関して幕末の状況を想起すると、やはり「血なまぐさい」という表現がでてくるのであろう。

烏丸通を上立売まで歩くと、新しくできた市立工業学校、染織試験場、成安女子学院などが見えてくる。同志社も「目醒める様な発展」を遂げていた。烏丸通に面して、うどん屋、パン屋、食堂、菓子屋、煙草屋が並ぶ「便利な町」となっており、それらの二階で学生が間借りしている。キャンパスの西方、烏丸通よりも西で、昭和三年(一九二八)までに学生街が形成されていた。

第十三章 おわりに

プロテスタント・キリスト教の教線がアメリカ合衆国から日本に伸びてきた。京浜地方をテリトリイとする長老派、ならびに改革派などとは異なり、会衆派を主とするアメリカン・ボードの宣教師は、大阪と神戸を宣教の拠点とした。博覧会を契機として京都を訪れ、京都府の要職にあつた山本覚馬と接触した。外国人が居住できない京都で宣教できる可能性を探りたかつたのである。

なぜ同志社は京都で出現したのか。その答えは、アメリカン・ボードの日本での展開をもとに説明しなければならない。新島襄はその一員であり、アメリカン・ボードから給与を得ていた。

大阪では知事に拒絶されたものの、京都の榎村正直と山本覚馬は、新島の学校創設の企図を歓迎した。それは、京都府が出資するわけではなく、東アジアに宣教師を派遣できる富裕な宣教団体アメリカン・ボードが資金を拠出するという前提での歓迎であつた。このような経緯を踏まえると、明治八年(一八七五)に同志社英学校が創設され、

後に発展して同志社大学となる過程に関わる重要な人物として、新島襄、J・D・デイヴィス、山本覚馬、横村正直の四人を挙げることができる。そして欧化主義の時期に、大学設立に協力した知事の北垣国道もそれらに加えるべきであろう。この五人がキャンパス創造に関わるキーパーソンであったことは明らかである。とはいえ、創立者である新島襄の全身全霊の努力と、後継者たちの貢献が大学の景観を形成したことは揺るぎない歴史的な事実である。

注

- (1) ヘップバーンとブラウンがそれぞれ始めた塾が明治学院大学の源流となった。なお、ヘップバーンは「ヘボン式ローマ字」でもよく知られている。
- (2) 古屋安雄『日本のキリスト教』、教文館、二〇〇三、三四頁。
- (3) 和田洋一『新島襄』、岩波書店、二〇一五（初出は一九七三）、一〇九—一〇頁。
- (4) 前掲(2)六二頁。
- (5) 日本基督教協議会文書事業部 キリスト教大事典編集委員会編『キリスト教大事典』、教文館、一九九五、一〇九六頁。
- (6) 前掲(5)三四三頁。
- (7) 前掲(5)四四五頁。
- (8) 前掲(2)二二頁。
- (9) 新島襄「請願帰朝の書」、『新島襄 教育宗教論集』、岩波書店、二〇一〇、(一八七一年頃)、六九頁。
- (10) 同志社編集・発行『新島襄—その時代と生涯—』、晃洋書房、一九九三、一七八頁。
- (11) 新島襄全集編集委員会編『新島襄全集三 書簡編一』、同朋舎出版、一九八七、二八頁。
- (12) 太田雄三『新島襄—良心之全身ニ充滿シタル丈夫—』、ミネルヴァ書房、二〇〇五、一二四頁。
- (13) 本井康博『アメリカン・ボードの二〇〇年—同志社と越後における伝道と教育活動—』、思文閣出版、二〇一〇、vi。
- (14) 前掲(3)一四一頁。
- (15) 前掲(13)一〇一頁。

- (16) 前掲(3)一四八頁。
- (17) 新島襄全集編集委員会編『新島襄全集一 教育編』、同朋舎、一九八三、(一八八三年四月稿、一八八八年十一月活版) 七三—七四頁。
- (18) 前掲(12)一八二頁。
- (19) 前掲(13)一〇二頁。
- (20) ①新島襄「基督教皇張論」、『新島襄 教育宗教論集』、岩波書店、二〇一〇、(一八八三)、二四〇—二四六頁。②河野仁昭「新島襄全集をめぐって—新島襄と仏教徒たち—」、同志社大学出版部、一九八五、七頁。
- (21) 前掲(3)一六—一七頁。
- (22) 前掲(13)六頁、八七頁。
- (23) 「大坂」と「大阪」を厳密に使い分けるべきことは承知しているが、本稿の本文中では「大阪」で統一することをお断りしておく。
- (24) 前掲(13)六四頁。
- (25) 前掲(13)六五—七七頁。
- (26) 前掲(13)七九頁。
- (27) 前掲(13)八一頁。
- (28) 河野仁昭「京都の近代化と同志社英学校」、学校法人同志社編『新島襄—近代日本の先覚者—』、晃洋書房、一九九三、二七三頁。
- (29) 前掲(28)二七三—二七四頁。
- (30) 前掲(28)二七四頁。
- (31) 前掲(17)七二頁。
- (32) 前掲(12)一四二—一四四頁。
- (33) 前掲(17)一三〇—一四一頁。
- (34) J・D・デイヴィス・北垣宗治訳『新島襄の生涯』、同志社校友会、一九七五、五五—六〇頁。
- (35) 上野直蔵編『同志社百年史 通史編一』、同志社、一九七九、八〇—八一頁。
- (36) 小枝弘和「今出川キャンパス前史に関する一考察—薩摩藩二本松屋敷を中心に」、同志社談叢、三二号、同志社大学同志社史資料センター、二〇一〇、一六—一七頁。
- (37) 竹内力「二本松邸に関する史料」、同志社談叢 三五号、同志社大学同志社史資料センター、二〇一五、九七—九八頁。
- (38) 「大工頭中井家の絵図」(テーマ展 京都の社会と文化)、京都市歴史資料館、一九九九。
- (39) 喜多川守貞著、宇佐美英機校訂『近世風俗志(一)(守貞謄稿)』、岩波文庫、一九九六、二三八頁。

- (40) 前掲(17)口絵四頁、下段、写真「同志社最初の専用校舎」
- (41) 河野仁昭『キャンパスの年輪―同志社今出川校地―』、同志社大学出版部、一九八五、一一五頁。
- (42) 前掲(41)一六頁。
- (43) 前掲(42)と同じ。
- (44) 同志社編『新島襄の手紙』、岩波書店、二〇〇五、三二五頁。
- (45) 前掲(17)七二―七五頁。口絵六頁。
- (46) 前掲(34)六四頁。
- (47) 前掲(41)二四頁。
- (48) 前掲(47)と同じ。
- (49) 河野仁昭氏によると、今出川通りが拡幅された大正六年に、正門は現在の位置となった。前掲(41)三一頁。
- (50) 前掲(44)一三七頁。
- (51) 前掲(35)八八頁。
- (52) 前掲(51)と同じ。
- (53) 前掲(10)一八〇頁。
- (54) 前掲(35)一九六頁。
- (55) 前掲(54)と同じ。
- (56) 前掲(53)と同じ。
- (57) 前掲(41)三八頁。
- (58) 前掲(41)一〇〇頁。
- (59) 前掲(53)と同じ。
- (60) 伊藤之雄『京都の近代と天皇―御所をめぐる伝統と革新の都市空間 一八六八―一九五二』、千倉書房、二〇一〇、二二頁。
- (61) 森忠文「明治初期における京都御苑の造成について」、造園雑誌、四一―三、一九七八、二二頁。
- (62) 成川敏郎「京都御苑の今昔」、史料京都の歴史月報2、平凡社、一九八〇、二頁。成川氏は、明治十六年までにほとんど完了したと述べている。この点が森忠文氏とは若干異なる。
- (63) 「京都の博覧会」、京都市歴史資料館、二〇〇三。
- (64) 前掲(41)一〇四―一〇五頁。河野仁昭氏によると、第二次世界大戦後に華族制度が廃止になり、昭和二十二年から二十七年まで華族会館は占領軍に接収された。その後に、華族会館は同志社に売却され、啓真館と命名されて使用された。昭和四十七年(一九七二)に取り壊されたが、門は今も今出川烏丸東入ルに残っている。
- (65) 前掲(41)一〇〇頁。
- (66) 山下津美「平安義會のあゆみ―二條家と同志社をつなぐもの―」、同志社大学歴史資料館報、一一号、二〇〇八、三七―四二頁。
- (67) 前掲(41)四三頁。一四四三円で購入し、明治四十四年三月に五二〇〇〇円で売却している。同志社による藩邸跡地と宮家・公家屋敷跡地の取得は、京都御苑の外でのことであった。もし大内保存事業がなかったならば、同志社の敷地は今出川通よりも南にも広がったのかもしれない。新島襄はキャンパスの空間デザインをどのように描いていたのであろうか。
- (68) 三国谷三四郎編『京都府師範学校沿革史』、京都府師範学校、一九三八、一八頁、三六頁(第一書房、一九八二、復刻)
- (69) 植田彩芳子他『近代京都日本画史』、求龍堂、二〇二〇、二〇五頁。
- (70) 森光彦『京都府画学校への道』、京都市学校歴史博物館、二〇二〇、四五頁。
- (71) 伊藤之雄「京都御所・御苑空間と近代日本の天皇制(下)」、京都市政史編さん通信、二九号、二〇〇七、六頁。
- (72) 橘愛治「地図で見る同志社の土地―明治八年から明治二十七年まで―」、同志社談叢、一八号、一九九八、一五八―一六四頁。
- (73) 現在、ここにはBBS京都放送会館が位置している。
- (74) 前掲(17)「同志社女学校」広告(明治十一年六月)、一一頁。
- (75) 河野仁昭「明治中期の同志社校地」、同志社時報、六三、一九七八、七四頁。前掲(57)でも河野氏は同様の指摘をしている。ちなみに、一八九〇年一月に病臥に伏した大磯から妻八重に送った手紙には、高く売ることが見込める土地を購入したことを書いている。河野氏の指摘の一端を示す事実であろう。また、この事実は、新島自身は死期が迫っているとは思っていなかったことを示唆している。(新島襄全集編集委員会編『新島襄全集 四書簡編Ⅱ』、同朋舎出版、一九八九、三五四―三五五頁)。
- (76) 大日方純夫『維新政府の密偵たち―御庭番と警察の間―』、吉川弘文館、二〇一三、二一―三〇頁、七四―七五頁、一〇三―一〇四頁。宣教師は虚偽であることをわかったうえで洗礼を施したのか、あるいは真実だと思ったのかもしれない。後者の場合、言語の壁があり、信仰心の真偽を宣教師は見極められなかったのか、はたまた安藤の演技力が格段に優れていたかのいずれかであろう。
- (77) 前掲(76)七二―七四頁、一〇二―一〇四頁。
- (78) 星野靖二「幕末維新期のキリスト教という『困難』」、岩田真実・桐原健真編『カミとホトケの幕末維新』、法蔵館、二〇一八、二六五頁。

- (79) 坂口満宏「一八八〇年代・仏教系の反キリスト教運動―排耶書の普及と結社・講談会活動―」、同志社大学人文科学研究所編『排耶論の研究』、一九八九、一九一―一五七頁。
- (80) 斎藤吾一郎、一八八一。
- (81) 藤島了穩、一八八一。
- (82) 前掲(80)一頁。濁点は出典による。なお、明治十六年刊行の『耶蘇教国害漸蹙論』は、佐々木忠順という人物の編輯によるが、カタカナ混じりである点は『耶蘇教国害論』とは異なるものの、内容はほとんど同じである。
- (83) 前掲(79)一二九頁。
- (84) 明如上人伝記編纂所『明如上人伝』、明如上人廿五回忌臨時法要事務所、一九二七、六七〇頁。
- (85) 前掲(84)六七一頁。「大教校」は、坊官・下間家屋敷跡に建てられた、現在の龍谷大学大宮学舎である。
- (86) 前掲(79)一三五頁。
- (87) 前掲(79)一四六―一五四頁。
- (88) 福井純子「排耶というトレンド―一八八〇年代京都の宗教事情―」、立命館大学人文科学研究所紀要、八〇、二〇〇二、一六八―一七一頁。
- (89) 池袋清風『池袋清風日記―明治十七年上―』、同志社社史資料室、一九八

- 五、二二四―二二九頁。
- (90) 前掲(3)二五五頁。
- (91) 前掲(20)②一六一―一七頁。
- (92) 柏原祐泉『真宗史仏教史の研究 Ⅲ近代編』、平楽寺書店、二〇〇〇、三二―一三三頁。
- (93) 前掲(92)四二―四一三頁。
- (94) 前掲(12)二二八―二三三頁。
- (95) 高久嶺之介「新島襄と北垣国道」、伊藤彌彦編『新島襄全集を読む』、晃洋書房、二〇〇二、四一―五五頁。
- (96) 内貴甚三郎著作兼発行『京華要誌』、一八九五、七四―七九頁、(新撰京都叢書刊行会編『新撰京都叢書 第三卷』、臨川書店、一九八七)。
- (97) 岩井武俊編『京とところどころ』、金尾文淵堂、一九二八、一三三―一三四頁。
- (98) 前掲(97)四〇―四一頁。なお神田喜一郎氏の生没年はわからない。
- (99) 前掲(97)九七―九九頁。

(本学文学部特任教授・名誉教授)